

科学技術振興対策特別委員会議録

昭和三十九年十一月六日(金曜日)

午前十時三十三分開議

出席委員

委員長 前田 正男君

理事 菅野和太郎君 理事 佐々木義武君

理事 福井 勇君 理事 山内 広君

大石 武一君 小沢 辰男君

小宮山重四郎君 佐々木秀世君

保科善四郎君 細田 吉蔵君

大原 亨君 三木 喜夫君

委員外の出席者

原子力委員会

駒形 作次君

総理府事務官

(科学技術庁長

官官房長)

江上 龍彦君

総理府技官

(科学技術庁原

子力局長)

村田 浩君

十一月六日

委員 池田正之輔君、内田常雄君及び

河野正君辞任につき、その補欠とし

て大石武一君、佐々木秀世君及び大

原亨君が議長の名で委員に選任さ

れた。

同日

委員 大石武一君、佐々木秀世君及び

大原亨君辞任につき、その補欠とし

て池田正之輔君、内田常雄君及び河

野正君が議長の名で委員に選任さ

れた。

本日の会議に付した案件

科学技術振興対策に関する件(原子

力行政に関する問題)

○前田委員長 これより会議を開きま

す。

科学技術振興対策に関する件につい

て調査を進めます。

この際、先般、八月三十一日から九

月十日までジュネーブにおいて開催さ

れました第三回の原子力平和利用国際

会議並びに九月十四日からウィーンで

開催されました国際原子力機関第八回

総会の経過の内容について、政府当局

並びに出席されました委員各位より説

明を聴取することといたします。

最初に、駒形原子力委員。

○駒形説明員 先般、八月三十一日か

ら九月九日までジュネーブにおきまし

て第三回の原子力平和利用国際会議が

開かれまして、私もその代表の一員と

いたしました出席をいたしました。

今回は、いま申し上げましたように

第三回でございます。第二回は一九

五八年に開かれましたので、六年間と

いう時間がそこございましたのでござ

います。それで、第二回があまりに

膨大な会議になったというので、今回

は原子動力というものを主題にいたし

まして、問題の幅を縮めまして開催を

されたのでございます。すなわち、こ

の六年間におきまして実際に原子力発

電所が運転をいたしておりますので、

その運転をいたしました発電所の経

験、それから、この間に行なわれまし

た動力炉の研究開発、そしてそれらの

ものをもとにいたしまして、将来のエ

ネルギーにおける原子動力の役割りと

表数でございます。

いったようなものを討議検討されたの

でございます。

それで、発表されたところによりま

すと、この会議に集まりました者は約

四千人というところでございます。原子

動力というふうなぐあいにはほりまし

て、会議の規模をなるべく集中しよ

ういたしましたけれども、やはり人数

はいま申し上げましたよりぐあいに

四千人に近い数になっておりますとい

うことは、原子動力というものが各国

におきまして現在の段階で非常に関心

事であるということであらわしておる

ものであると考えるのであります。

なお、蛇足かもしれませんが、申し

上げますけれども、この参加いたしま

した中で一番たくさん参りました国は

どこかと申しますと、それは西独でござ

いました。一回、二回とも西独はそ

んなにたくさん来なかつたのが、今回

は西独が最大の参加者国であるとい

うことは、西独がこの原子動力に對し

して非常にみなみな関心を示し

ているということであると感した次第

でございます。

そして、その会議は、全部で論文が

七百四十七編提出をいたされまして、

その七百四十七編のうち口頭発表は三

百三十四編ございました。わが国と

いたしましては、この七百四十七編の

うちの二十九編というものでございま

すし、なお、口頭発表三百三十四編の

うち十編というものがわが国の口頭発

表数でございます。

会議は、ソ連のアメリカノフという

方が議長になられまして、そして一般

部、技術部会という二つの種類の部

会に分かれまして、一般部会というの

はもっぱら全般的事、それから技

術部会というの技術的問題を取り

上げるのでございます。技術部会のは

うは三つに分かれまして、そして全部

三つは並行して討議をされた、会を持

たれたという次第でございます。

まあ、このように非常にたくさん

論文、大体一メートルぐらいの高さに

なるような論文の量でございます。た

ですが、この詳細のことは、私も参

りました代表団といたしまして正式に

御報告申し上げます。私どもも参

りまして、目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

います。目下その整理を急いでござ

え方に対しますと、大きっぱいいい

まして、発電設備というものは四〇

多い場合五〇近くも下がって

まいっておるといことが発表されて

おるのでございます。ともかく一九七

〇年ぐらにおきましては火力発電と

匹敵できるものであるといことは一

般にいわれたのでありますけれども、

どうも今度の会議の結果から見ます

と、それはもう少し私は早まるのじ

やないかというふうなぐあいに考

えられるのでございます。たとえはア

メリカの原子力委員会で大統領に報

告いたしました大統領報告の中には、

そのころに五ミルないし四ミル一キ

ロワット時当たりというふうなこ

とがいわれたのでありますけれども、

その数字は今度のアメリカにおき

ますオイスタークリーク発電所

において実際にその辺まで数字が

出てまいってまいっておるとい

うふうなことから、私が申し上げ

ましたようなことがわかれると思

うのでございます。

しかしながら、一九七〇年ごろに

あるいはそれよりちょっと前から

に経済性が確立するといわれても、

た何もしないでいて日本において

これが確立するわけではない。日本

といたしましては、やはりこれに對

して十分なる努力をして、やるべき

ことをやらなければ、日本において

これが確立するということにはなら

ないのだというところも、そういう

ふうなぐあいに感じてまいりました

対して非常な熱意を持って、いろいろなタイプにつきましてそれぞれの図が一生涯命出してやっておる。これは前から私どもが承知していたことでありましたが、数年かかった今日におきまして、その研究計画というものはそれだけが一生懸命出してやっておるのではありません、もう自分のところは動力炉のタイプについて結論を出してやめた、なんているところは一つもなくて、まだまだ向上、研究をさせていかなければいけないということで、一生懸命出してやっておるのでございませう。この点は私どもも、相当新型動力炉等についてあちこち研究が進んでおりましたので、相当程度の見込みというよりなものが出てくるのじゃないかというよりな感じを持ってまいったのでありますけれども、そうではなくて、それどころか、従来の線をそれぞれが一生涯命出して伸ばしていくというよりなことを、私ども非常に強く感じた次第でございませう。

それから、第三番目にあげられますことは、国際協力という問題を各国が非常にうまくやっておるということでございます。今度の会議におきまして、一般部会の中に国際協力という会合が持たれました、アメリカ、ソ連並びにイギリスはじめそれぞれのところでやられております計画の中から四つ、五つの計画が発表されたのであります。ともかく原子動力の分野というものは非常に規模が大きくございませうので、ただ一因で何でもかんでもやるというたような考えではございませんで、国際的に協力して大きな問題を解決していこう。私が申し上げました第一の、各国がそれぞれの立場で自分の

ところの新しい炉の開発をやっているというのを申しましたのですが、そういう立場に立つて、しかもその立場で国際協力というものを非常に推進しているというのに対して、私は強く印象を受けたわけでございませう。それからもう一つ申し上げたいことは、今回はいろいろ新しい話題がいろいろありましたけれども、その話題の中で、海水を原子力を使って真水化する。そうして同時に電気をつくる。結局電気と水の二つのものを原子力でつくっていくということが話題となったのでございませう。これはアメリカ、ソ連共同してこの原子力平和利用の新しい分野をいたしましてやっていくというよりなことで、非常に力を入れて進めてまいってまいります。水の問題は、そのこと自体、世界的視野で見ますならば大きな問題でございませう。そして水と電気を両方というこのことは非常に興味あることでございませう。それに加えまして、これが国際協力のもとにやっていく、IAEAが主になりまして、ジュネーブ、それからイスラエル、そういうところをいろいろと計画を進めておるといふこと、そのことは非常に重要なことであります。今後この方面の平和利用というものが相当活発に進められるのではないかと、いろいろに感じた次第でございませう。

いろいろ申し上げたいこともございませうが、先ほど申しましたようなぐあいに、まとまったものは報告書とさせていただきます。はなはだ足りませんけれども、大ざっぱなこと恐縮でございませうけれども、報告を終わらせていただきます。と思います。

○前田委員長 次に、菅野和太郎君。○菅野委員 八月末にジュネーブで開かれた第三回原子力平和利用国際会議に、われわれ国会議員がオブザーバーとして参加させてもらおうというところがこの委員会において決議されました。結局自民党からは保科、福井、佐々木、小宮山、私の五人、社会党から岡良一先生、その六人で組織しまして参加いたしましたのであります。団長に、私、福団長に岡先生ということで多分たのであります。行くまではみなそれぞれ行を別にいたしまして、私と副団長の岡先生とは終始行をともにしたのであります。きょうは実は岡先生が出席されて、その詳しいことは岡先生から報告してもらおうし、私はただ概略だけ申し上げるという約束をしておいたものであります。詳細なことは私はほとんど用意しておりませんが、御報告することができないことを御了承願いたいと思っております。

まず最初ワシントンへ参りまして、行く前から大体原子力委員の人に会いたいというのを申し出ておいたのであります。ほとんどみなジュネーブへ行っておるので、おもだった人は留守でありました。国際課長とその他専門の人々と三、四人で懇談をいたしましたのであります。大抵私どもからはテーマを前もって申し出ておまして、原子力発電の将来の見通しと、それから使用済み燃料の処置をどうするかというよりなことテーマを出しておきまして、そのことについて話し合つたのであります。ちょうどワシントンへ行つたところが、アメリカの原子力法の改正が決定したということを知りましたので、おのずから

話が原子力法の改正のことにも入つたのでありまして、そういう点でいろいろと話し合つたのであります。その晩は国際課長の招待でカクテルパーティーを開いてもらつて、向こうの委員の人といろいろ懇談をいたしましたのであります。

それからロンドンへ参りまして、やはりロンドンの原子力委員会のほうへ申し出てございまして、これも原子力の事務所で先方の人に会いまして、燃料関係の専門家などがわざわざいながらロンドンへやってきました。われわれと一緒に懇談したのであります。やはりアメリカの原子力法の改正という問題が話題になりました。使用済み燃料の問題についてもいろいろ話が出たのであります。

それから、なおこれはジュネーブの帰りでありまして、パリでも、前もって申し出ておいたのであります。これは私も出席するように申し出たのであります。私はほかの用件のために出席ができません。これは岡先生だけが出席されて、フランスの原子力委員の方と懇談されたのであります。

それから、ジュネーブへは、開会の初めは福井、佐々木、小宮山先生が出席されて、九月四日からは私と岡先生と保科先生、三人が出席したのであります。ジュネーブの会議のいろいろな所感については諸先生からお話があると思ひますが、ただ、私は六年前の第二回の原子力平和利用国際会議に出席しております。私は第二回のときと比較して私の所感を申し上げてみたいと思ひのであります。

昭和三十三年に第二回の原子力平和利用国際会議があつたのであります。その前年には当時の宇田原子力委員長、ここに御出席の当時の原子力局長の佐々木局長と一緒に各国の原子力の実情を調査いたしましたのであります。昭和三十三年にも、ジュネーブへ行くときに、あるいはスウェーデン、あるいはスペインとか、各地の原子力の事情を調査してジュネーブへ参つたのであります。

今回行つてみて驚いたことは、各国の原子力の研究が非常に進んでおるが、それにひきかえて日本がおくれているという点であります。この点を今度の会議で非常に痛感いたしました。形先生のお話がありましたとおり、この原子力の発電の問題については、ことに日本がおくれているという痛切に感じたのであります。ジュネーブでも、日本の出品その他の研究状況のことなどが諸外国に比べて非常におくれているという痛感を感じ、また非常に恥ずかしい思いをいたしましたのであります。

そういうことで、日本の原子力の研究が諸外国に比べておくれていること、それと同時に、原子力の発電の問題が何だか外国よりも一歩おくれってしまったというよりなこと、こういう問題について、実はジュネーブにおきまして、政府代表の駒形先生はじめ代表の方と、私と岡先生と保科先生と三人でいろいろ懇談申し上げたのであります。先ほど駒形先生より御報告があつたようなことも話し合つたのであります。この際日本としては、今後の原子力時代に乗りおくれぬように、ひとつ思い切つた原子力政策をと

るべきではないかということが話し合
いの結果の結論でありました。いまま
でのような手ぬるいやり方ではないか
ということ、どうすれば今後の原子力
研究を一大発展させることができるか
ということについてもいろいろ懇談した
のでありますが、さしあたり諸外国へ
科学技術庁から派遣されておるアタ
シエをもう少し数をふやそうではな
いか、それをひとつ来年度の予算に計上
してもらうことを帰国後直ちに大臣に
申し出ようじゃないかということ、
それから、諸外国へ駐在しておるア
タシエの会議を毎年一回開いて、そ
うして各国の発展状況をお互いが情報
を知り、あるいは研究し合うとい
うようなチャンスを与える必要があるの
じゃないかというように、ひとつ
つ来年度の予算に計上してもらおうと
いうようなことを話し合ったのであり
ます。そういうことで、この際にか
く原子力の研究を一そう盛んにしな
ければならぬというムードをひとつ日
本に起こさすようないろいろな手を今後
考えるべきじゃないかということ
を話し合ったのであります。このことは、帰
りまして、われわれ一行と大臣とも相
談しまして、われわれの一行の感じを
大臣に申し上げて、大臣に特にいまの
予算の問題についてはお骨折し願いた
いということをお告げ申し上げたので
あります。そういうことで、私は前の会
議を知っておりますので、とにかくこ
の六年間の間に日本がおかれてしまっ
たのであります。

なお、そのときにも話し合ったこと
であります。日本の原子力の研究が
おくれたということについてはいろいろ

原因がありますが、その一つの原因は、
やはり政府がこの原子力をほんとうの
国策として第一に置かなければならぬ
のに、その点において政府が原子力の
研究、科学技術の発展ということを重
要政策とはいわぬが、少し軽視して
おるのではないかと、そういうこと、
まあわれわれの率直な意見としては、
科学技術庁の長官などはもう政変ごと
に変わるようなことなくして、ほん
とにそういうことに熱のある長官を政
変いかにかわらさず長く勤務させる
というように、これまで考えるべきじ
ゃないかというように意見も出たので
あります。そういうことで、われわ
れ帰国すれば、この原子力の研究の発
展ということについて、国会議員とし
てお互いがひとつ協力ながら協力しよ
うじゃないかというのを大体みな
話し合って帰ってきたのであります。
それから、ウイーンでの国際原子力機
関の総会にも、これは福井先生を除
いて五人出席いたしましたのでありま
す。このウイーンでわれわれの一行は解散
をいたしましたのであります。

それは、ただいま胸形さんからもお
話がありましたし、団長からもお話が
ありました。このジュネーブにおけ

る原子力平和利用国際会議が非常な人
気を呼んでおったということでありま
す。われわれの予想以上に各国が関心
を持っておった。これは、近き将来に
アトミック・エージが来るということ
の認識のもとに、各国がそれにおくれ
をとってはいかぬということ、非常
な熱心さを示しておる。これがまた
ジュネーブで行なわれておる軍縮会議
の裏の作用であるとも私は見てとつた
わけでありました。

それは、ただいま胸形さんからもお
話がありましたし、団長からもお話が
ありました。このジュネーブにおけ

クに、広島やあるいは長崎の原爆に感
情的にこれと取り組んで、そうして
つまでもそういうようなことでは、と
うてい原子力の平和利用なり、あるいは
動力革命時代に対処することはできな
いのじゃないか。もっと積極的に取り
組んで、そういうものを征服して、そ
してこの動力革命に対応するという日
本人の気がまを超党派的にやらなく
ちゃいかぬということを痛切に感じま
したことをつけ加えまして、御報告に
かえさしていただきます。

それは、ただいま胸形さんからもお
話がありましたし、団長からもお話が
ありました。このジュネーブにおけ

やはり有機化学工業方面に使うべきで
あるという、その質的な分担関係とい
うものを非常にしっかりと打ち出したこ
とは、将来の世界経済におけるエネル
ギーのあり方、行き方というものに對
して非常に明瞭な性格づけをしたので
はなからうかという感じがしました。
それから二番目は、今度の原子力平
和利用国際会議、ジュネーブの会議の
性格であります。第一回目は、いわば
秘密のペールをぬぐい捨てましてそれ
を平和利用に役立てようというので、
いわばその間非常に希望のな観測的な
要素が多かったように感じます。引
き続いた二回目には、先ほど団長から
も話がありましたように、やってみま
すとなかなか技術的にも原子力開発と
いうものは困難な面があるし、同時に
またエネルギー資源がほかにいろいろ
出てきましたので、原子力エネルギー
の動力利用というものは悲觀的な
見方が強く出てきて、その意味から
いいますと、いわば一つの消極的な
態度になりがちだったという感じだ
たのです。今度はそれと打って変わ
りまして、この六年間に築き上げま
した着実な技術的な基礎を根拠にし
て、言うことなすことがもうほんとう
に地に足をつけた発言、見通しでござ
いますので、まさしく原子力の開花期
と申しますか、新しい時代を迎えた
という感じをひしひしと受けたのが今
度の会議の特徴ではないかと思いま
した。

それは、ただいま胸形さんからもお
話がありましたし、団長からもお話が
ありました。このジュネーブにおけ

して組織的でありまして、やれ油が出たからどうだとか、少し経済性がないからどうだとかいう考え方でなくて、必ず原子力発電あるいは原子力エネルギーの利用というものは人類の将来に役立つものではないかという信念で一貫して進んでいるように受け取られました。したがって、わが国のように大きいふれ方がございませぬ。ゼロから百へ、百からゼロへというふうな、振り子が大きくて、その中心できちっと進んでいくという態度がどうもわが国には欠けておたような気がするのですけれども、各国民にはそういう感じがなくて、着実に、組織的に、一貫して問題を進めている。その結果、これは国際協力の点もありますが、従来各国内で開発しつつあった技術的な様式というものは、どんどんそのまま進んでまいりますし、またそれが経済的な見通しに關しても明るい見通しを持ってきておりまして、先ほど駒形委員からお話がございましたように、非常に原子力エネルギーの経済性の問題は、従来以上に早く問題を解決するのじゃなからうかという感じを受けたのであります。

また、新しい技術——と申しますよりも従来からいわれたものでありまますけれども、ファスト・ブリーダーとか直接発電とかいうようなものに対しては、たいへん進んできつたものがあるに感じますし、同時に、原子エネルギーを新しい方向に使うという行き方、たとえば先ほどお話に出ました、海水の真水化の問題とか、あるいは宇宙開発にこれを利用する問題、あるいは運河の開き、これを使う問題、あるいは従来からありましたけれども、パッケージ・リアクターの僻地

における利用の問題というふうなもの盛んに論じ合ひ、また展示会等にこれを展示しておりましたのがたいへん注目し値するものだと思います。もう一つ感じましたのは、先ほどお話がありました、実は日本は原子力に關しては相当おくれで出発したのですけれども、その間進んだものと思つておたのですが、必ずしもそうじゃないのであります、むしろいままではそれほど注目されなかつた国々で進んでいる国が多くなつてきています。たとえばスペインなども進んでおた。たとえばバキスタンなども引き続きやっております。また、ほかの国でも、必ずしもいまままでいけば原子力の研究開発に關して先進国と思われぬ国々が逆になつて進んできたという点が注目すべきだという感じを受けたのであります。

以上總合いたしました、わが国のこの問題に対する考え方、あり方というもの、従来からいまして、わが国は、特に原子力発電の必要性に關しては、エネルギー資源の面からいきましても、あるいは輸送、港灣等の面からいきましても、あるいは外貨の節約等の面から考えましても、日本ほど実はこの問題の必要性に迫られておた国はないのであります。にもかかわらず、各国民のうちにスムーズに、しかも積極的に、また早いテンポで進んでおたというところは、たいへん反省を要することだと感じまして、今後とも、先ほど部長からお話がありましたように、立法府、行政府、あるいは民間の人、こぞりまして、抜本的な体制のものでこの問題の処理に當らねばならぬ

じゃなからうかという感じを受けた次第であります。 ○前田委員長 次に、小宮山重四郎君、小宮山委員、たぐいまる野田君、佐々木先生、保科先生、駒形先生からいろいろの御報告、感想を述べていただき、私、大体のことはもう申し上げたこととはございませぬけれども、私の感想の一端を簡単に申し上げますと、日本としては非常に諸外国と比べまして、原子力行政といいますが、原子力の開発というものが、諸外国においては兵器とともに進んでいる、ウエポンとして原子力を開発している。そういう点、日本は全然平和利用のみにおいて開発している。

今回、私初めて原子力平和利用国際会議に出たのでございませぬけれども、行く前は、先ほど先生方がおっしゃつていましたように、日本という国は原子力というものは相当進んでおたのではないかと、いろいろ認識で行きましたけれども、行って見まして非常に驚いたことには、原子力の開発が非常に進んでおた。それにはいろいろ理由があると思つたのでございませぬけれども、一時叫ばれたような、原子力に対しての行政の一貫性が、ない、そういうふうな問題。それから、日本においては特に原子力爆弾を受けましたために、非常に原子力という点に對してナーバスだ、神経質だということ、原子力行政が非常に

この点については、将来、いま佐々木先生がおっしゃいました一九七〇年とか一九八〇年、二十世紀の後半末にはこうなるんだということを考へてまいりました。また、エネルギー革命と

いうふうなものが、ほんとうにもう現実に入つてまいりました。ここで政府も政治家もほんとうに力を入れて原子力の開発をしなればいけない。また原子力というものに対して、国民に徹底的にPRする必要があるのではないかと。その神経質な面、たとえば原子力潜水艦なども、やはりある面では非常に神経質な面があるのではないかと、うかがいたします。こういう点について強く感じてまいりました。今後、政府、政治家、こういうものが原子力に對して大いに力を尽くすべきだということを感じました。こんなところでございます。

○前田委員長 次に、福井勇君。 ○福井委員 今回のジュネーブ会議の開催に際しまして、国会側から、菅野團長並びに国会内の前田委員長等の格別なる御尽力によりまして、一行がつつがなくその任務を果たすことができましたことを、参加者の一員として福井より厚くお礼を申し上げます。 今回のジュネーブ会議につきまして、それぞれの委員からいろいろ御報告がございましたようにございませぬけれども、私は重複することを避けまして、私だけが事情によつて米国の原子力潜水艦を見ることができましたので、それらのことに關連して一部の御報告を申し上げてその責めを果たしたいと思ひます。 その前に、一言ジュネーブの会議のことについて言及させていただきますが、今度のような大ぜいの人々、他国と比較すれば決して日本の参加人員は多いとは思ひませんが、日本としては非常にたくさんの方が参りました。私

はまた打ち合わせなどでたびたびその心配を打たしたのでございませぬが、出張の目的は非常に効果がある結果をもたらしたと思ひますけれども、一行は政府側と国会側との緊密な連絡をとらねばだめだということを、この席でたびたび非公式に申し上げた。ところが、向こうへ行つてみますと、やはりそれぞれ忙しいので、こちらで十分連絡をとつて行かなくちゃならないということとを私がほんとうに考えたのに、向こうへ行つてからやればいいじゃないかというところで、さて行つたところが、現実はそれぞれ立場で忙しいから、ごつた返しておる。また、連絡するということについては、向こうにおいては實際問題ではちりぢりばらばらの行動になつてしまつた。したがって、私は菅野團長より先に佐々木君なんかと先発隊として参りましたが、政府側の連絡を一度も受けずに終つてしまつた。これはとんでもないことだと思ひます。私は一度も受けていない。そういうことは今後よほど双方、私のほうも注意しなからぬと思ひます。これは謙虚な気持ちで言つておるわけですが、私は全然連絡を受けていない。そういうことで、駒形君が日本の代表演説をする内容も全然知らない。こういうことをやつたそらだということ、あとでその内容を聞いた。もちろん私たち委員に日本の代表演説の原稿を見せなければならぬという責任もございませぬが、つまり私は連絡が不十分であるという一つの材料として申し上げるわけですが、これは駒形委員の責任ではない。双方が十分連絡をしていないという一つの材料として申し上げるだけ

はまた打ち合わせなどでたびたびその心配を打たしたのでございませぬが、出張の目的は非常に効果がある結果をもたらしたと思ひますけれども、一行は政府側と国会側との緊密な連絡をとらねばだめだということを、この席でたびたび非公式に申し上げた。ところが、向こうへ行つてみますと、やはりそれぞれ忙しいので、こちらで十分連絡をとつて行かなくちゃならないということとを私がほんとうに考えたのに、向こうへ行つてからやればいいじゃないかというところで、さて行つたところが、現実はそれぞれ立場で忙しいから、ごつた返しておる。また、連絡するということについては、向こうにおいては實際問題ではちりぢりばらばらの行動になつてしまつた。したがって、私は菅野團長より先に佐々木君なんかと先発隊として参りましたが、政府側の連絡を一度も受けずに終つてしまつた。これはとんでもないことだと思ひます。私は一度も受けていない。そういうことは今後よほど双方、私のほうも注意しなからぬと思ひます。これは謙虚な気持ちで言つておるわけですが、私は全然連絡を受けていない。そういうことで、駒形君が日本の代表演説をする内容も全然知らない。こういうことをやつたそらだということ、あとでその内容を聞いた。もちろん私たち委員に日本の代表演説の原稿を見せなければならぬという責任もございませぬが、つまり私は連絡が不十分であるという一つの材料として申し上げるわけですが、これは駒形委員の責任ではない。双方が十分連絡をしていないという一つの材料として申し上げるだけ

はまた打ち合わせなどでたびたびその心配を打たしたのでございませぬが、出張の目的は非常に効果がある結果をもたらしたと思ひますけれども、一行は政府側と国会側との緊密な連絡をとらねばだめだということを、この席でたびたび非公式に申し上げた。ところが、向こうへ行つてみますと、やはりそれぞれ忙しいので、こちらで十分連絡をとつて行かなくちゃならないということとを私がほんとうに考えたのに、向こうへ行つてからやればいいじゃないかというところで、さて行つたところが、現実はそれぞれ立場で忙しいから、ごつた返しておる。また、連絡するということについては、向こうにおいては實際問題ではちりぢりばらばらの行動になつてしまつた。したがって、私は菅野團長より先に佐々木君なんかと先発隊として参りましたが、政府側の連絡を一度も受けずに終つてしまつた。これはとんでもないことだと思ひます。私は一度も受けていない。そういうことは今後よほど双方、私のほうも注意しなからぬと思ひます。これは謙虚な気持ちで言つておるわけですが、私は全然連絡を受けていない。そういうことで、駒形君が日本の代表演説をする内容も全然知らない。こういうことをやつたそらだということ、あとでその内容を聞いた。もちろん私たち委員に日本の代表演説の原稿を見せなければならぬという責任もございませぬが、つまり私は連絡が不十分であるという一つの材料として申し上げるわけですが、これは駒形委員の責任ではない。双方が十分連絡をしていないという一つの材料として申し上げるだけ

で、駒形さんの取り扱いを追及するの
ではないことを、誤解のないように願
いたい。そういうようなことで、今後こ
種の会議などについては、くどいほ
ど国内で連絡を十分にとっていく。私
たちはOECDの会議に、前田委員長
の指示のもとに五月、六月に三木代議
士とともに参加いたしました。これは
二人で密接な連絡をとって、出先とも
十分な連絡をとって行きましたので、
後ほど少しも遺憾のない報告ができた
ということをお私はいまでも誇りとして
おります。でございますので、語学の不
足している日本側の多数の人が行くこ
ときには、その注意を特にしていただき
たいと思いますので、本委員会できつ
つ正式な希望として申し添えさせてい
ただきます。委員長におかれましては、
今後その点の御配慮をお願いしたいと
存じます。

私は、きのうきょう非常に新聞の記
事に多く見ますところの原子力潜水艦
の件について、御報告の一助といたし
たいのでありますが、本日の新聞記事
によりますと、沖繩に入っておる原子
力潜水艦を日本の新聞記者に全部見せ
たということをお報道しております。そ
の内容も相当詳しく出ております。そ
れに先立ちまして、私、ジュネーブの
今回の会議の最中に、外務省並びに科
学技術庁の関係者の前もつてのあつせ
んがききまして、ジュネーブの会議の
途中から、米海軍省で外務省から特
に原子力潜水艦スケート号をニューロ
ンドンにおいて見せるから来いという
招請がございましたので、この潜水艦
に乗りまして、いろいろ私なりの専門
的な検討を加えてまいりました。その
当時の記録をいまここにたくさん持っ

ておりますが、ただいま委員長の了解
を得まして、文書をもってこの科学技
術委員会に報告させてもらうことにい
たしまして私の報告にかえたいと思
いますが、委員長、いかがございま
しょうか。

○前田委員長 けっこうです。

○福井委員 御了承を得ましたので、
文書をもって原子力潜水艦スケート号
の見聞の報告をさせていただきますと
思います。

以上をもって私の御報告にかえさせ
ていただきますと思います。

○前田委員長 以上で報告の聴取は終
わりました。

別に本報告に対して質疑もないよう
でございますから、本日はこれにて散
会いたします。

午前十一時二十七分散会

科学技術振興対策特別委員会議録
第二十二号(閉会中審査) 中正誤

ページ 行 誤 正
二五七 法規範 法規違反

